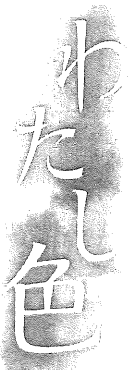


# 土曜 ライフ・楽しむ

## 「まくらの小三治」拝観料払ってでも



生活情報誌「悠悠と。」  
編集長・真鍋康利さん



落語好きの知人は4月に予定されていた「柳家小三治独演会」をとても楽しみにしていました。それがコロナにより7月末に延期、結局これも中止になり、大変残念がっていました。落語に限らず、こうした催しはすべて中止や延期になっていきますが、早く開催できると思いますね。

自粛期間に、その知人から借りた小三治師匠のCDを飽きることなく聞いています。落語はもちろんのこと、まくらばかり集めた「まくら全集」は「まくらの小三治」の名の通り、聞きごたえがあり、夜半に1人で思わず噴き出してしまい、家族に気味悪がられたこともしょっちゅうでした。



CDを聞きながら、友人の道内落語家、笑生十八番君に聞いた話を思い出しました。

1971年、北海道大学の落語研究会がプロの芸を聞こうと落語会を企画しました。まだ道内ではプロの落語会が開かれたことはなく、後に有名になるSTVホール名人会が開かれたのがその2年後のこと、まきの草分けでした。

北海道好きの小三治さんは昔バイクでよく来たらしく、各地で落語をしながら道内を巡るツーリングだったようです。「帯広に行くのでその帰りなら寄れるよ」とごいひ

で日程が決まり、小三治さんと三升家勝二さん、金原亭馬太呂さんの3人が出てくれました。小三治さんの出しものは、最近のテレビなどではあまり聞くことのできない噺でした。

その時に「高座返し」に任命されたのは、エペエの十八番君です。高座返しというのは、前の演者が終わると座ぶとんをひっくり返し、羽織とか湯飲みを片付けたりすること。そのため緊張しながら着替えていたら、馬太呂さんにきつく叱られたそうです。

帯を体の前で絞めてから後ろに回したら、「それじゃ着物の形が崩れる。だから学生

落語はだめなんだ」と言われ、何度もはたかれながらたき込まれました。口演後、馬太呂さんが小三治さんの着物を非常に手際よくひざの上でたたむのを見て感動したそうです。以来体の後ろで結ぶことができるようになり、今も感謝していると言います。



その後上京のたびに新宿末広亭などで小三治さんの噺を聞いたそう。眼光鋭く、黒紋付き、帯も赤の地模様入りの黒帯が、色白の顔に大変よく似合っていたと言います。

落語家に人間国宝は小三治さんを含めて3人だけ。初めて柳家小三治師匠が人間国宝になったとき、「払うのは入場料ではなく拝観料」という冗談がはやっただけですが、拝観料を払ってでも見たいし、聞きたいものです。